世田谷村日記　　石山修武

九月七日

朝、ＡＮＹの開放系技術ノート、とりあえず中断する。書き続ければ際限がない。昨夜、講談社Ｓさんからいただいた中沢新一の「アースダイバー」読む。この人は才人だ。才人、才に溺れなければ良いが。台風十四号が日本海にまだ居る。アメリカ南部を襲ったハリケーン・カトリーナ他の地球の災害は異常なように思うが、本当は古代からこういう事は繰り返されているだけで、ただ我々は情報通信の進歩でよくそれを知るようになっているだけかも知れない。

今日は午後、結城、甲斐両氏と第一回の農村研究会。

十五時過、結城、甲斐両氏来室。第一回二十一世紀農村研究会開催。討議参加者は石山を含め三名、他、サポーター五名程。第一回の研究会は最小人数でスタートさせようと、そして、それぞれのメンバーの個人の歴史を介して、どうして事を始めようとするのかの、率直なそれぞれの土台みたいなものを話してみよう、それなくして、会は成り立たぬとの考えがあったので、そのようにした。沢山の参加申し込みがあったのだが、第一回は梅干しの種を固めようという事だ。多くの参加希望者には申し訳ない事をしたが、先ず主催者サイドの気持をゆるやかに確認したかった。来る者は拒まず、去る者は追わずの原則は初めから決めていたので、気を悪くしないでいただきたい。二十二時過ぎまで。良い始まりの集りだった。

二十三時半世田谷村に戻る。

途中で、山田脩二が何かの取材の人を引連れて乱入したのも面白かった。しかし山田さんは変わらぬ人だな。元ダムダンの鈴木隆行氏、死去の報入る。彼は、短い人生であったが、精一杯生きたと思いたい。しかし、哀しい。彼は、良い仕事師だった。

九月八日

台風去り、空高く澄む。昨日の疲れが残っているが、元気を出して研究室に行こう。